



詠歌大概後釋 完

特別
イ 4
3163
93



巖捲藻恐氣禮抒魂幸布神能御心越此天地登共
耳傳辨坐轉

須米呂岐能御世常新辨耳治給弊類萬延機乃大本

登人農情乎知流辨起此歌延道導教意榮南瑞籬

能久輔世從如何耳叙也咲花能移飛來耳計流楚

波追風受唐類大舟能走流勢飛成越吾花王舍小

賀若延浦波並與類學能教子同士耳舳櫂艦梃

真帆耳片帆耳引茂撓毋說諭佐禮唐流此書共此

賜除世耳並轉歌詠習布吾耳比登新幾淺香山淺

幾心能人々波以都茂文机乃上耳於幾轉春農野



邊種能山路乃遠々理々耳数多河類萬廻言能葉
生繁流辨幾手著登茂世良禮奈婆小父能教子宇
辨奈布人々能猶世耳数多久成轉自可羅此道能
上古乃真情廻状耳立復類辨幾本廻心能多年新
母奈羅邪羅免哉末陀幾耳於毛比與路許保比筒
弘化四登瀨天婦年睦月仲頃硯耳向比轉

松籟亭青藍女自筆取轉

端書新都

詠歌大概後釋上卷



岡熊臣著

此大概といふことの名昔より流るゝて多極中
細言定家々の年老終つ海らり梶井宮為快親王
よかきとまゝとまゝといつり歌阿の抄もよけ
と見えたり此法親王も八十二代後鳥羽院天皇
法弟九皇子山門座多ふとておあを以て定家
手歌の教うけたるひよとそ古紙一紙抄と
もいふも紙一ひより書とまゝもいふと
り抄題号の四字も此にてありといふ説何ぞ抑

皆附會りてとらふ多し其を唯歌をよむるに
の大むねといふことなり今此後釋あり世の
人々の説よりと安堂の歌よむるはあもなる
應記あるとのこしうりしつゝ又む人内をる元
くよ○詠八字書小為命切榮長言也又歌吟長也
と有りは字歌詠作るあといふ用あるを後世の俗
習なりあるを唯俗習の事とて歌作るある歌工
イカといふ故と也とて色はこよし上代を歌う
多むやといひて歌をうちけりて謡ふものなき
婆此字を借きても何れもあらず又此
字錢ナガメとよむをある純さよ何れ○歌ハ

字彙小哥古歌字漢藝文志哥永言又註从二可長
引其聲以誦之也。兼用歌詠○大を度奈切音代小
之對也註共大同大和大原大王之類是也古字無
點後加點以別易坤六二直方大○概ハ許意切音戲
取也一日拭也又居大切音蓋義同説文滌也○昔よ
り歌よむもの法なるとあるは、何れも、歌
を伴ふといひ長きなるといふとそトありといふの
以とも多しといふを云辨、輕富考以空法字より
か、昔の如く、道の心を、歌よむといふは、
し、此れと、その、道の心を、歌よむといふは、
く、男ひぬる、後、の、昔の、詩の、風、も、い、多、く、
の、變、り、て、唯、陽、の、傳、り、る、を、の、純、大、友、大、津、な、り、の

皇子達の御よりやうくその侍をも作らうはけ
ておのつめく抄字紙教もその風抄の移りひ
そ免ぬるなめりさきむもやうく高良の始より
出典そめたる事よぞあるにさきむもそのころそ
いま宛書大かひ作さるるに
どのやうな所よりなり
本阿六教抄など何れも印りせり
りよるそのく下謂後成式喜撰式孫娘式聖唐不
見式安倍清り又五髓脳とく公任新撰髓脳能因
哥枕俊頼無抄仲実綺語抄清輔真儀抄といふそ
の阿りそ於八雲抄よ移りたるはきくいと多
しつぎきも病の抄紙などさきびく心作若
よん心のゆきをとらんたうもくを不食此

病人う驚怖多紀もくつましり
一りりりいんそんぬあくべし
みりり小識るまいうり
が心といふそのを容易みそく
き海今もはきりよりそく
右よりふめくまやく彼あり
の風移りて遂に今世のま
りるまのなまをまそく
といふそ
○心身を治ると心のけくたなごのそそ中昔
るでもしひくはれせりあり八雲抄用

詠をよみあをばの事と云々も御うも
をばの極なるを成るるしりての法事ある何
ら既唯のいひさ母をいしりて此の事へある
る〜そめく考りり抑のつ〜しりあ何のう
へり自他射用延約通略照應反對緩急離合過去
現在未来下知なり行さぬぐ此活機轉用〜雅語
俗語轉語字音語なり抑の差別出来とも猶世号小
其のこの字もな〜その沙汰もなり〜とい
よ〜りあり上古の人を考明字より以上の
妙賢ととも〜之終ハ唯〜の要のそのいひ

あ〜都鄙い〜のの如きりこそ何色あ何〜
皆皇國なり此正雅の音終〜と出れもその
正雅の音終をも〜教もよみ此を教も音終
もそのいひ法は〜こ〜かをさ系を改いあ
〜自然なる定りの極も遠をあり〜なり
此のそのかゝの人の歌詞と〜常の言語より
別よいな〜急惟常の語も〜たもふ心を
ち出〜永く謡ひ〜あり仲古の始仁徳天皇
善良然以前を〜〜姑くまじも空風のころ〜
中古のむ〜めとい〜りまじも空風のころ〜
平家のものいひ〜も雅言のそ多御〜うを歌も

●たぐい何りふさうべよろしくよみあはしきぞ
さのそ歌の格まゝもふをその格なごりて別を
さを用ひねども自然と定りの格よ遠あるいな
うりしをやうく中古の末つゝこより
奈良終る
萬葉書集
をいふ世のひとのたのみのしひめも妙なるか
るゑ終字音の格はくひ何をも轉音轉語鼻音語
音便なごもまじり出あももとうりの格なごも
轉旋流移ししはひきえもな何格あもあり
なごせしより西雅の言終どもやうやう失を
ゆねと遠よも常のこのしひ格のこもくそさ
べはよく遠ひつゞるとかぬちぬやうふなりそ

きりうしつとなご歌詞とく考のこのしひより
あよひつり列のものゝどくなごもあふさほも
おのづゝ遠あも出あも免つゝどりしはるし
忌りその此の人をもあきもく妙うららひあは
をばさうどし唯歌詞とらふも我言格のあふ
ひとつあそくよみけけしるち抄よやうく
いつとなく昔終自然なる定格の詞はくひり遠
ひくひらさうあえぬよもをさも出あもなごり
あくさ近終世の歌よも久し彼遠ひ格り

要訣の詞はうひのふふをたと遠ひと教をわく
りて例の教詞なりとん始りてその建てる者
そわづらふ志倍とらふとをのこ大事なると
あつてよみゆへなること我々新巻の故大
人ふつて古を學び今を承つて其ふあをを詞法
うひの定指何るはと我々考定たるは總覽詞の玉
緒法用抄とて其近頃年春庭翁の詞のやちりし
ありしふふと出来て今も世に感ふ所き限なく
ありぬるを抄の抑々どころ北邊先生ののうが
ありてなりしりともいふに玉知這神の抄所ありと教者
ふへて新巻ともなり於法とて同記ゆへなりと

たつて上巻の四雅の世も立うつる信くやむの世
うみの説よふあをを傳といふと何れもそを雨
中吟末末紀極教大概の三教を三教抄とあつけ
あき我説ゆとて人を自あをを傳を子たる人な
りともてそきより抑々も世に人の所より馬を
かつてとなりていへりこいといとらけきぬと
たりともいふあををはといふも世にいふ如く
古人の帝のそののりひ詞はうひの定指なきを
やうよ二巻三巻の書を解けて傳授のあはるは
そのふちりて今世此名目をたてむとあはるは
鏡をうてりて今へはるをてを傳授しる人
とてそのあふく又雨甲今末紀を何れと
定あひの名をうて後よ傳授せしもの多し
その中より大抵もいふやりの人なりきと
たつて定あひの概もいふやりの初学のそは
教うむきはなるとるべきものなりとて五抄べた

雅風ニヤビを今もほこつて後にも失なはれず見む
るたる然るは是を中古以上のこや眺しつて諺コトバ
たゞしつて素心の辨コトトの趣を飾イハるは落カガるは有の方
まじりしは然シるはなまは世ゆゑ今世も有り
こも事有りありこよむをさるはつて是は歌
といふとも素心をいふ一の実情我がこゝと
の歌の情よなまは語を絶ふと中古以上の雅言
を用ひさといふも思ふ心のこゝろありこ入
の年あも入べきやうめと何れよみあはれし
うあまむおのづらも素言生活の用ひも夢のこ

は日中古以前のこや眺る氣ケツカかりし世の風を
習ひありしは然シるはつて世に遊ユば世人のさ
あまを降オチりまはれ事こそ是れ今世もつて世に
いふそのはよみもつて遊ぶことの始ハジり入らるは
いふ知つてあまぬ事の要人先最知りかゝる
要人有りしは是れよみあまのこゝろをいふは
ぬ雅言を遊ユび語らるはつてあまをいふは
用は定物世々の風調の後分なまをいふは
はれつてあまをいふはつてあまをいふは
いふはつてあまをいふはつてあまをいふは
よみつてあまをいふはつてあまをいふは

誠 実なりし西都のわらふよ引返さつ知んぬひと
つ の 料 よ よむむのなりしつらねほつ移委し死す
い 別 よ 乃 の 埋 水 と り 一 冊 よ 何
げ 乃 ち つ り 合 せ 又 一 冊
情 以 新 為 先 求人之心詠之未詠

○情、字彙小慈盈切音晴性之動處是情董仲舒曰
人欲之謂情又慈良切音牆と有るをみえ唯歌よ
みいづるまとの心動くところをわいていづる
○ゆて世一役みよく心切つ死と何りけりも今
よみ出さるん歌のころもいづる人の心
ふるけぬめまよし心ある傳を聞人よりあま
ちをよむやぬまのたがうけりしと心けを新

くせんそそみりかゝる実の心も何れぬ何
巧を構つ役りしをさる信や信しつひはく
るそ後世人の怨詠なりしをわあべと
あふさくしつゝ世歌の本のまよとの道の趣も遠
へる所なるも紙極篇の石上杉湖言又うひ山
踏杯よいふくたむらゝ痛免いそまゝと趣あも
程よゝゝ心切并へむしつゝあまゝよひとた保
を引出た記説も何りしつゝ○八雲抄抄用ら都り
や一知知人の歌を登るや二行しぬやうある秀
白を好むや三句の入わがや四風情の入わがや

し終始をたゞりたるの歌をとりてさすむるに尤入
不がとりふぬし又つち此言も家純爲るひし
或る松の梢も夜よりあり地をいしし地性
色も終始なりぬし心くもいし地性あり同く松
たきども新古今集後帝極引るくくる松の尻
やよらららんまのくすかつる少男麻の髪また終
屋大人の歌も此歌をとりていふくひくくを
松子やまゝひくく新踏色ゆくさきくまの髪これ
ら終よめどいし風性も極とりふぬし地性あり
初心のまのくをいし心をまゝ終始あり

○同身三條詞のいし不がとりふも終始あり
いし終るくそららんまのくくやく河川のまとい
ふ地性を河川の流とよみ木かたしし地性あり
地性を木枯の葉などいし尤曲なり入不がとりふ
終しとなりかたししいし地性は終始あり
終し終るくやまをとりんよりよみ終ひてや
おのづからえんまもらりくもすこやうも
終もし終るくいし終る人の目も終よよみいし
らんをこそ終べをものなき

詞以舊可用

用新古今古人之歌同可用之
不可出三代集先達之所

○詞の字を字彙に詳茲切音辞言也告也訟也又
惟曰分斯之類皆助語詞楊子詞人之賦麗以則と
有り○前段は情以新為先と有り少法はて詞以
舊可用と戒はつゆに誦ふ詞を上りもりあや
あうに此の類の之語を遠くはあつたのり
さゆもいふもいふも一のり也此よりい
はるるに記となりはるに記ハ今記もむ
ひる業んをりは情をいふも新く記も
人のよみあつたぬに記ゆひはるるに詞をいふ
てしゆへ人のあつたよみもひるひるをいふ

詞法を考ひもといひはるるべし後世の
いふに後まはるるに新法をいふも
あつた今時の他借に歌などのやうな
一云といふもえりまを情もむべ記も
かゝる詞不可出三代集と有りて定家
々各家々
時代の定家も今時あつたハ代集も出
べあり
むとん終つたハ代も勿論廿一代集の
新法古
今集の中あつたも八代集の中作者の
記も取用ひ
より記を先定家々のあつた直つた
教誡
のさへもなづかへ今ともをいふも

さる終も何なるなりたるを古今集の歌詞
述とも感ずるなりやあまのさしとを初心純を
のさる海うせくよむ魚をい何と世世
も河海うせくも人も好よむ詞又其時代よ
きて人とのよみ癖なる終又いしや
詞焉をい終詞と字音又終終の終が終
ども終り終る終るなりまに判終といふ
そのも何うこれを其ぬ何る詞をよみ出
る終作者の^没後七八十年が男を何う終る
べり終る百年をりも終るなりとい何終

ガちりよむまに終るも何と世世をり終る造
化の流りよ終るわくのゆくと終る風氣終
天地のるりえ海これむさやう終る人の
よみ出るあ終る終るまねびと終るも終る
愛一をい終るい終るも終るやう終るひ免
と終るさむ世をい終る人ねえ終るぬ終るう終
も終るくよみ終る事終る何終るべ終るの終り
今終る終るい終るあ終るく終る終る終るよ
み出る終るをや終るより終るくい終る終る
も人も終るの終るを終るい終るあよ終る

ゆゑに袖をかきぬるに伊勢の集の歌あり是を返
歌とほくまをぬるにうらまはぬまは集胎撫骨の
法も似たりと或抄あり

風體可效不論古今遠近見堪能先達之秀歌宜歌可效其體

○風韻會云上行下效謂之風字彙云撫鳳切音俸
因風感物曰風と有り○體字彙云他禮切身也六
書正偽別作體躰並非俗作體非鄭玄云體成形也
又質也○あゝと風體といふと一首はあゝと
いふなりあゝととさと相と相連續しあゝと
し物のづゝと一首の體をあゝとをいふと

の姿も或は健なる有りよらげたる有り面もま
まあれし知を結りたる有り恨もきを親もや
たる有り徳もやたる有りそ風躰さ向く有り
一やうなるあゝとさ知もとも有り
ともあゝといふあゝとさ知もとも有り
るとその風體何とさくとも有り
有りまじりたる體といふと大むぬ風雜集もさ
集の風なり西中明未集記の體といふも更なり
凡歌をたふんといふもあゝと詞のべり
さあはれまし古も代の感哀をも人の愛もあも皆

べきものなきをいれづらき風洞をのぞき居らむ
とせんより水の傳の心むへをさすはる藤原
くせむいづよみしづる歌の何れに姿をとな
るるをいづかき定家らの撰あきし抄ども
もいづきもはるれをいづせらるる又由正
し歌の何れを撰むと詠はるる
くすゆきなりいづる人よれき式をいづつ
り結つる人の述懐なども物別なりをいづ
後頼朝臣の述懐をいづる又後成の述懐百首な
といづらびれいづるやうなるさし

あり後頼朝臣の述懐をいづる歌を世の中
いづるなりゆきをいづるさし
よりいづる後成の述懐百首の中よりいづる
著あると流し年をいづる袖のい
うあせむいづるやの奥の井のいづる
世の中をいづる二首をいづる
葉子深殿の后純沙弥の花籠をいづる
いづるいづるいづるいづるいづる
物いづるいづるいづるいづる
ありいづるいづるいづるいづる

后あり抄やうふらそ何うしり色い々を現也
おとりにしせぬう記すもな記すん詞と純を
以し海しき姿なる歌をあるべからざる事な
るも山く風雅玉系の二集を為兼々の流風あく
彼今もふびひこせし詞を何ししきせしと教
へ給ひしとそはるゆゑもしきぬ詞はたな
る歌多し中よそをておをを詞をぬ歌も多記をし
し色を彼今の流をを昔より異種としき皆人嫌
ふ事なりしし雨申の未未記なとあるるか
違を定衆々の自化ありていし子説何とそい

やもかゝるも教戒の爲あきむ必彼體なる風をよ
むゆ記すなり而申水の中おましきしきも
くく記目よりもあきしゆる花のきりも早もな
しりるもさぬあぬぬかすしきい山の毛
結そしちしきり藤のしきいれりしししししし
風をなびし村も地ちししり結歌風雅集よ入
まきとく彼集の風折しひやる藤又未未記を
今ん所着といふ事なしひありその申す年の内
しきもあまなり一とせよあしひ流むりも地
山の毛「おしし」のあありと記を山を色何

の秀歌もあつてさういふ風體なるものもあつた
なりといふ歌の風體もさういふ風體なるものもあつた
出ると歌のさういふ風體なるものもあつた
唯その歌をさういふ風體なるものもあつた
くんと誤つてさういふ風體なるものもあつた
といふ歌もさういふ風體なるものもあつた
之を歌といふ三派の位品をわけるとやかく
やといふれいふ風體なるものもあつた
能の先達之秀歌とやいふ風體なるものもあつた
さういふれいふ風體なるものもあつた

先達の之秀歌といふ風體なるものもあつた
三重の昔位を言ふ風體なるものもあつた
大概のねり手別々秀歌體之大概とて百三首何
るか何れの作の風體なるものもあつた
家々時代さういふ風體なるものもあつた
いせるといふ風體なるものもあつた
の因りて家々云々の風體なるものもあつた
清氣な姿のさういふ風體なるものもあつた
いふ風體なるものもあつた
ら事と難せるといふ風體なるものもあつた

上の句を下よなり下句を上よりありあつて
成るる句の上よといふむ同し事成す
けり此あり関あり唯一字二字ありても年を立
て廿一字なりはなすなり一旬わたり
ちよ句下よりても交年詮あるべかりて
年意 是より年をとりて
左方は 是より年をとりて
もふよとも思ふは此の如くなり
らむやと昔より難なり尾にきよはゆもい
くねうも治古今抄外書はるのこよ
翅よりくくはゆをらふ字宛のみかりむよ

此歌と申た色どぬ極むはど如難なり後抄遺
日と申すも遠人もなり一ふ来たる家の何
者もよりし上子の志も如く極むはゆ
るなりとあり是は後抄の歌よりし如ゆ急う
りし此歌のたさなりなり是昔を尤上子に
なきを極む者ふつ又六白富の合り是極
家録は 1 わさうも也此極の極のち極むは
年名成す抄し判と上純七あも定とあり
らん下句なりも優は侍る成初のみ文字と
是べのらるる流宛の古今伊勢が此歌は海の色

の如くおちが中の時あゆむとらふりきらよ
くわくはとひはくくゆりとり杉母あやも
好まじき残りの千載山人の昔の詩を記くと
むすしき床をそふ谷風ふきと朗吟ふ石床苗
洞嵐空拂玉案抛林鳥獨啼といふ詩の心なり
此歌の色あはくくむの詞はくわらくむき
床も衣傷ふよえむ好むもくわくや此の書あ
終れを組入くくやうわくくあと好まじく
りそくたくとくあう集り春書くくみく
原をら今そくくわくくわくく又上句り

きくくくくくくくくくくくくくくくく
ゆ毎夜を寝あくくくくくくくくくくく
吹くくくくくくくくくくくくくくくく
吹をりくくくくくくくくくくくくくく
り

詠歌大概後釋 上終

詠歌大概後釋下卷

岡熊臣著

近代之人所詠出之心詞雖一句謹而可除并之七八
十年以來之人所詠出之詞努力不可取用之
於古人之哥者多以其詞詠之已為流例

○此派より上り情詞風貌を備へたりて或るはびり
寧ろ教戒し給へりしは遠近古今を備へ給へりよ
ろし給へりし風貌も好しとて或るはあふよる
歌のよ詞を造るゝや物うせんに然るは色詞を
よし給へりしは或るは或るは近代といふ
と細註より七八十年以來といふをいふは精

心を学しよとみ出さるる心詞歌謡をくわのう歌
うよみながらそのうらみ歌謡の両方といふ
出さるるより古來制の詞といふものなり
昔の制詞を

新勅撰「けしき」を著す様子を記すに云く

みよし山家隆新古今「おゆも抄の初吹か

嵐を霞む國のすむ村宮田々日「よし山家

今何と云ふもむのしき枝りまの吹抄

制詞のしき何り列す冊より傳ふるなり但し

是らのしき何り昔も今も人の心とよみ出さる

と云ふ何りしき歌ぞむのしきよむ抄か
不知しき何りよりよみ出さるるも
そのくあり此近代といひる七八十年
いづるを上文よいつるは今此何れも七
八十年以来といふは定家公の歌の七十八年
を今ありて也古代となきむそ世も制詞
ぬ何れも詞を今世を今も増進つるなり
文唯此の人のうらみを此をへむるなり
そのしきといふ上文は詞不可出三代集といふ
物なりといふなり出集抄は雨後陰雲以来記す用

まゝなり似たりとて定数部の中宛一文二文字と
いふとも耳よりいふやうなるあつたが何
れなる雅俗をよ記取人より何れを後系物格
政の人の歌謡とると宜いしをいしを也と朽も
ひしよ建曆法詩歌名の時ある春が末のすつやま
はしとつとよみしを評定の時定数部など志
記りあ感いなりしを同年の七月より五首の集り
りしお引のやま流りまかしくもとやうく
よみしうしをいふれりあう雅俗しもを
家を浦山しく思ふ毎記りしを歌よみあもな

記取りかたりとて山下純人あつて
流しとて第一の答を記し老を記しその
くしとて記しとて記しとて記しとて記し
く歌よみ出しとて記しとて記しとて記し
信記部 定数部替りの ありあつたりとて記し
まありぬどあわききせんものい記し歌よみ
とて人よりよみせあわくは記しとて記し
又愚問賢答り明德院堀川沙百首り甲斐うぬえ
山の姿も姓もく雲純なるもよかしくあ雲とい
ふを定数部中納言山の姿建保の以後歌と記し

新古今一 ちる事のわきまをいかにみれば夜の雪をよ

砂世甚の山風 左近中将 良平

本歌古今一 あつてさそ ねん 中まはれきりあ
と成る事後のわきま形を

宝永五年のうゝ歌さるをようしりきとどお解り
とらざるをせんたれが如くと家話とす

後撰権一 名無河せも地日敷を何とそれとあつと沈
む瀬々の埋木 定家

本歌 古今一 名無河せも地埋木何とそれといふせん
と見え知れず

たむさう純少納の海ちりゆく雲も草葉もたむさう

夕暮 定家

本歌 後撰 浅ちふの山登れ志の糸をのよめと
りさるる人の燕

あつとふも物歌の心をとりて風籠をわく

新古今一 雲のあつとふ いもいも 杉の葉

あつとふの山 後鳥羽院

本歌 古今一 梅うゑを来ぬる雲は かき なるも

いもいも雲を降は

新古今一 梅のあつとふ ささ なる は なる は なる

やとらせ登道のり 家隆

本歌 古今「
けのふとら喜の山道よとらむさくさく

ともいもぬ旅ねいしう

新古今「
葎のくや露のしむる衣のくくく

まかもねん 後京極

本歌 古今「
さむらう衣のくくくくくくくく

侍さんいしらのむね

三つあま本歌よつぎくくくく

新古今「
雲のくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくく

本歌 後拾「
心何ん人よせをやつのあけ新波了

くくくくくくくくく

新古今「
鳥の海や日の光のうらうらくく

秋をくくくく 家隆

本歌 古今「
あま木をくくくくくくくく

くくくくくくくく

続古今「
卯の雲の霧も雲れいつくくく

朝也とけん 名家

本歌 古今「
夏のよそまこよひあくくく

雲のいつくくく 自也とけん

続後撰「
天竺川とる紀わくくくくく

五月五日 為家

中歌拾遺 天の川と云はれわたりおろしぬとも君の
船の年よりこゝろをまて

新古今 大宮を梅の白ひり露とつらもりもまてぬ
妻の松の目 定家

中歌 古今 てもせはらりもまてぬ 春の歌の勝
自歌 古今 てもせはらりもまてぬ

新古今 約と云はれ袖うらもりもまてぬ
新古今 約と云はれ袖うらもりもまてぬ

わづりの雲は夕暮 日
中歌 新物 例もあつらふのみと云はれ
わづり 例もあつらふのみと云はれ

家集 秋 たいぬ夕日 かつきこの松よものあふ
の後も逢ふむ 日

中歌 拾遺 山をまて夕日 かつきこの松よものあふ
むらもりもまてぬ

五よえ 詞ひををまてぬ
新古今 例もあつらふのみと云はれ

新古今 例もあつらふのみと云はれ
新古今 例もあつらふのみと云はれ

新古今 例もあつらふのみと云はれ
新古今 例もあつらふのみと云はれ

新古今 例もあつらふのみと云はれ
新古今 例もあつらふのみと云はれ

しん獨もねん 後宗極

如新「うすしり衣片しんこよひもや家紙待ら
んらりのちしね

「河川の山々の尾の志しりをのたししね
獨もねん

「はらうらち夏を人さぬさしれさうさや
家紙の家獨ぬ

「郭公なみやみ月のみしうねもひしうしぬ
色をぬしぬ

「はらうらちしんこよひもや家紙待ら
んらりのちしね

しんをわきをぬきし

如新「うすしり衣片夏の紙をとくし
しんこよひもや家紙待ら

んらりのちしね
○又如新の詞をしんこよひもや家紙待ら

んらりのちしね
○又如新の詞をしんこよひもや家紙待ら

「伊勢山雲れし
日せな

如新「君うらうら見乍しん伊勢山雲れし

つゆさかひのうらみ

又本鏡中女をとり又古徳古侍をとり好阿を
阿よりいぬまをとりいそをとり好阿を
好くへん正をとりま阿をとり好阿を博学をえと
る阿をよみ阿をとりよをとり石好をとりい
つゆさかひのうらみ

「あみちを越わたりつゆさかひを錦まきかき
人やえをいん

是ハ朱買臣の富貴而不帰故郷如著錦夜行の意
なり

「あき人よなをとりぬる豊心のあみちを
よきをとりなり

あきをとり同じ又張騫の故事哉

「天竺川をとりなりいそをとりいんあみちの好を

あきをとりなり

又定家々のいそ

「あきをとりいそをとりあきをとりいそをとり
あきをとり

あきをとり影落盃中五老峯の意あり又後水尾院天皇
の御製なり

「花のつらさゆゑにまゝ川浪のよきひあつぬらふ
うねり記

あま不辨空夜とふふ意ある句
いかにたゞと世に
いかに記あり格を遠く

「逢とみゝ一敷まかりのあもわれあ十年純ま
らそまゝの地よまは

あま虚生のの故事をよみ結つるなり又古詩を
事二條家流より唐朝を考へた字餘りも人の口
よける東坡山名あざとと朗詠の詩をいづきを
さるる一かきとていふ詩を感唐のま

波別ぬえとも移るよきひくらのまゝ

とらり又頼河法師の

「秋のまかりも
かゝるらん

吳人叙色掛秋霜新朗詠の詩あり又後水尾のま
どの

「あま純いへちやいつこある雪をたつるぬ
のあゝのまゝ

雲横奈嶺家何在雪擁欄檻馬不進のまなり中務
水々々記何もの池の夕陽を夜あつるまの記

二の独りごとくいふものゝ道の佳境よりいふり
絶妙の秀歌をいふものゝ三味も入り如く心を
面影の幽なるものゝ人のあるはぬ所を
業をへし容易出まぬは道に沈思せられたるもの
以三十六人作者集も百首より及ぶるをすうねし
為山傳心世五 齊宮女御百十本院中納言八首公
毎々のどの集れ歌もさつうなり般富門院大輔を
歌数ありくよみよとく千首大輔と申今世
板河維う千首よめ人あるべに歌のれど拍子
もやとけりよめを歌よみ出ませしもの又題と

りし事うがぬれど歌のりよみよとく申人あり
べしとて道ありとの勢古いともかゝるものあらべし
是云云とつり今按り此説よめるは板河時代は
心平歌よむるもの道の心を毎つねりしと
物しとていふはうねりむつねりしもの
の歌風の衰へいふをいふは引ひつらんと志
をしつらうふれいふは引ひつらんと志
きをさしてその衰へを引ひつらんと志
目當をさしてその衰へを引ひつらんと志
抄にもさしてその衰へを引ひつらんと志
以希の正雅の風を引ひつらんと志
是なるもの兼々流のまづの如き
との所為よめをいふは引ひつらんと志

人造よりして倭成定家の二大人まゝに各家々ま
よ地帳跡よりむるまじき皆悉く乃の大本と其の代々
より何れも地帳よむる何の爲なるぞとひかた
立望免終まはし〜地帳をのこ矯終ひ〜も
あ〜なり〜か〜く敬も人の實を失ふ終も〜を
あ〜まはきて其詞とかな〜に上代の西雅の云
酒を造〜る用お終知出〜肝要なりといふ〜
口出〜さ〜べ〜是態信が立〜る地造の事終散
なり

以同事詠古歌詞頗無念歎 以花詠花 以月詠月 以四季歌詠
意雜歌詠四季如此之時無取古哥難歎
○地帳本文よりよく抄え〜り回る〜も本詠り

以花詠花以月詠月といつる是なりりさきもその
か〜出〜あ〜ぬ〜とありまや〜定家今の歌
もも新古秋よ〜いあが免世〜も出ぬま〜地
里純〜此夕と抄り〜こえ本終を 新 行り宿
紙を出〜あ〜むき〜いつ〜もあ〜地乃夕〜
新古 一 大定を梅のよるひり〜終〜るりもま〜ぬ
暮夜のみあも本終 古今 一りもあ〜終〜るりもま〜
ぬ春れ終の臘月終ま〜るのどが終〜らま〜純
類なり出〜終〜も初学のその〜好〜てす〜
りま〜終〜又あえてま〜終〜るりもま〜

塙純の人よ何れを捨別の事なまらさし回々自
の影を中納言今いつともを時をわくねと秋の
よそよその竹もふしの如くはるるといふをとり
て秋十あ首内裡歌合よいつともをわくねと
の山人も空を仰ぐ自の影をわくねと考後深
居の跡を流中梅といふ題あり中納言今納言
の梅のま枝やいふ流らん物も心のありて君の
影もせよといふをとりてとへりま枝を梅
のいえはとも句をとりてとへりま枝を梅
ど四季の中納言をとりとも句をとりてとへり

あはぬわきまをなまらさし回々自
の影を中納言今いつともを時をわくねと秋の
よそよその竹もふしの如くはるるといふをとり
て秋十あ首内裡歌合よいつともをわくねと
の山人も空を仰ぐ自の影をわくねと考後深
居の跡を流中梅といふ題あり中納言今納言
の梅のま枝やいふ流らん物も心のありて君の
影もせよといふをとりてとへりま枝を梅
のいえはとも句をとりてとへりま枝を梅
ど四季の中納言をとりとも句をとりてとへり

伊勢小町
等之類也

人丸貫
之忠岑

○河の引の山時を古今夏何の曳の山時を
まつて多道う海さしと 暮を純くそ記く○み
よし燈のよし純く山古今春上 春かまみま
ま也いつこみし燈くよし燈く山平 雪をふり
つ○久くは此日の桂古今秋久くは此日の
桂も秋も移もます也也思ふはらん ○
あしき水はたしや 五月 古今恋 時をたしや 有
の何也まきさし何也まもし ぬ恋もさるる
○玉鐸の乃ゆく人る系二挽歌 玉をこの道行
毛獨谷似之不去者為便乎無云々 ○如此事全

雖何度不憚之とえよくはゆ○とくはゆき
まきまきり 古今春 どのゆきまきまきり
一とせ我去年と也いまん 今年と也いまん ○
月也何しぬ暮也昔の古今恋 月也何しぬ暮也
むりし純暮もぬ恋もいしつをまのの暮り
しし○橋もる木の下風 拾遺春 橋もる木の下
風もる木の下風もる木の下風もる木の下風
按り下風もる木の下風もる木の下風もる木の下風
玩ふ○石のくもと石純浦 古今雜木のくもと赤
石の浦の船寄る島かきしゆ 船寄る島かきしゆ

い何しきき免く近以松屋翁の新報多ぶひり
よりしききなり後断古色新報みく大く此物
徳い明らうふあきり三十六人集と公任今集
路つるといり殊よよと何き後妙因あきり
程遠くさきとたきり此後の中り殊字二雨何り
心を活けく見る庵〇人丸貫之忠岑伊勢小町
等之類也とい何る注も三十六人の内大概を攀ら
きしきり何り程外あも何きりさきり
雖非和歌之先達時節之景氣世間之盛衰為知物
由白氏文集第一第二帙常可握翫深通和哥之心

〇此一段を二条家流後末二段と一版と
さる説何きとも是に必竟一段なり何るを定家
々全熟妙抄を書給ふとい漢文をむねし
さるい念為知物由とい何るところ
下り錯居のやうあ何る何らいつと
り是に唯漢文あさなくあせり昔法にけ
らさるものなり申昔純末以法法との書漢文に
まあ作あうらかきり正々常多記あとい東
鑑をどえとも知法〇時節之景氣世間之盛衰
何公は傳云るが歌をよめん人も事ああき情を

先とく物は何もなきをとり常と心を在角とく
翁のちり木の葉の落るをも夢時毎とわもるをり
あつても目あもるももとくめと歌の風情を立
居り泣く心づくべ知れど始をんと何り地
さあく波えさり又古今集序も春終意の解り
花のちるをえ地の夕暮り木の葉の落るを歌り
何るを年毎子鏡の影よえゆる書と浪とを歌り
草花雪あふの海とるも多紙ねるる歌りるをき
あふを何うえおごりて時をうしなむ世り世
ちとく歌りも疎となりまると何り是皆人の

心を種とく物は何もなきをとり常と心を在角とく
らぬ如く形なきなり○為知物由は其物の由
ゆゑとく紙ねるも知るをいりり何ありとく
其原由紙悟道とるいとあを何り世唯その物の
知何るをいりるとねるもやと紙境とく毎
あはれとく畢竟紙ねる白氏文集といふものを
の先達みと何りぞといへども時并紙景気世る
の盛衰何るを何りよとく紙知る料とく彼
集の中一先二帙を帯り極端せよあうとく物語の
心も遊ばるぞといりりなり○白氏文集を白居

易が若知時より長慶年中了傳の詩文を集く五
十卷白氏長慶集と云々元徴が序有り長慶以後の
をくもへて白氏文集七十卷今世ふ行もく有り
白氏長慶集後序云白氏前著長慶集五十卷元徴
之為序後集二十卷自為序今又統後集五卷自為
記前後合七十五卷詩筆大小凡三千八百四十首
有五本一本在廬山東林寺經藏院一本在蘄州南
禪寺經藏内一本在東都膳善寺鉢塔院庫樓一本
付姪龜郎一本付外孫談閣童各藏於家傳於後其
日本暹羅諸國及西京人家傳寫者不在此記又有

元白唱和因繼集共十七卷劉白唱和集五卷浴下
遊賞集十卷其文盡在大集内錄出別行於時若集
内無而假名流傳者皆謬為耳會昌五年夏五月一
日樂天重記と有り今按小江談抄小嵯峨天皇得
白居易文集珍之と有又越後守平貞顯の金沢文
庫所藏の文集才世三の後ありいそく會昌四
年五月二日夜奉為日本國僧惠萼上人寫此本と
有りありありと有り樂天が自ら不謂日本暹
羅云々傳寫者といつるを此書のことなりんを惠
萼が本題文集といふゆゑ中昔の人長慶集云

もろ雄山一切經の帙古代の物といつり文集
一帙七卷三百首二帙七卷四百首以下各一帙七
卷あり凡十帙七十卷今世よりなり○深
通和哥心此注ハ殊よよろしかりきもく歌と
詩といひくく美なることごとく何れも必詩なり成
在かといひくよみ出むれといひくへの西雅の
出とのまのい何れを知りきりて
ねがもく先此細注削去るなりこそ詩と歌との差別を
はやく振井あ秋ゆのめりなりこそ
たり大なりといひゆりきり
和哥無師匠只以舊歌為師深心於古風習詞於先

達者誰人不詠之哉

○此一汲首章より汲く心を繕ふるなり
よ考作色といふより人の心を繕ふる
道なきを師も同業びくべにあらんを
といふをわらうとるを今後世より
中古以前と違ひ家人思ふ情を多し
れもあも何れも此録といふものよ
をわらうとるを今後世より
いひはるるわらうとるを今後世より
のよあつたるの考嫌など何れも

句よひうさまゝに実情を托げ偽る事なげ
もろくの題をとり何れもこの純如くは
古人名歌などの情を承るるひもよる心種
その題りむらひに我る事の情を承る
その風景極み我れひえに承る事純句を
承る事先ん其情を立文し句を承る
を求るを^{アヒ}賃金を出さるる^{タカラモノ}貨物を買はん
る事似たりたるといふ事よひも古歌の
とよより歌中情の実なるぬ縁を承る
けりともい^{タビ}魂なき木偶人^{ミンキヤウ}なり
な^{コト}る事なげさる法

しき今世り古風體といふ事純句はさなる
幾多の如新とよみ事なげとよむ句はさなる
歌を言ひより事なげなるあせあせの調べを
とよむ事なげといふはさなる^{古今以後の長歌}
五七五と^ハなげとよむ事なげといふはさなる^ハ調べはさなる
換りといふ事なげとよむ事なげといふはさなる^ハ調べはさなる
とよむ事なげといふはさなる^ハ調べはさなる
初めいひ出るといふ事古風體の歌り似る事なげ
とよむ事なげといふはさなる^ハ調べはさなる
今世り^ハ調べを承る事なげといふはさなる
すまむのづゝ三代集以後の事なり似通ふ

歌と云ふ正名亦如くべきもの純習イキホひなりう
けりゆゑ古風歌の歌とて別乎心かけ習ふは
とも大いココロ志情のよし我毎く何れも何よいひ純
づらまじらぐと古風の歌と似通ふものとなる
心掛べし長歌も五七五七のよきべし何れも
何れもゆゑおのづらアラコト祭儀をも物起しく句純調べを
とて純へなごしてこい純文もよみ習ひは
け別出しくよらういえつべし何れも何れも
歌をも御美なる何れもよきべし古歌近頃或人等
名耳を歌を大人の悦びのうらいとく何れも何れも
後なりとあざりいふ後も何れも今世よ何れも

を何れもその名目純なく何れも何れも
うもいひ難いよむゆのづらうらうら名どもい
ちさうとをえお程かゝるうら別々
備ふべしを今も略さぬ
ひと口成人純らうら一紙抄をよみ解け
をたう人うらなをのこあうら女三つり純々
優しくみづり楽も何れも何れも何れも
やういふ何れも何れも何れも何れも
片腹痛くいつてはづらうら何れも何れも
うら何れも何れも何れも何れも何れも
やう何れも何れも何れも何れも何れも
うら何れも何れも何れも何れも何れも

初夢をかく所は清くは綿糸の出来ありしと
いふも玉如達神の御玉をとりていふく
まゝなりと云ふ事なり

源 虎 臣



